

企業ニュース 日産化学

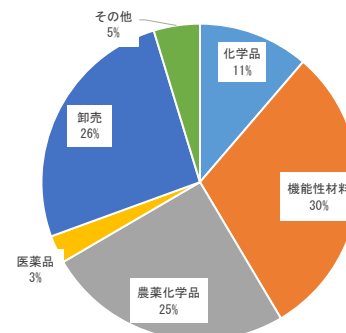
(東証プライム: 4021) <https://www.nissanchem.co.jp/>

作成者: 兵藤三郎

日本初の化学肥料会社

1887年に東京人造肥料として創業。我が国初の化学肥料製造会社。日本産業（日産コンツェルン）傘下の日本化学に資産等を包括譲渡し、日産化学工業に改称。2018年に現在の社名に改称。肥料メーカーから、微粒子制御、機能性高分子設計、生物評価、精密有機合成の4つの技術をコアに成長。現在は右図のように多岐にわたる領域で事業展開する。化学品はアンモニアを起点とした製品に加え、硫酸系製品も生産。機能性材料はディスプレイ材料（配向膜）、半導体材料（反射防止コーティング材）などを展開。農業化学品は農薬（除草剤、殺虫剤など）の他、フルララネル（動物用医薬品原薬）などを製造。足元の業績は、ディスプレイ材料および半導体材料がけん引、営業利益・経常利益は8期連続で過去最高を更新。

◇22.3期売上高構成比



(出所) 日産化学資料よりCAM作成

機能性材料が業績をけん引

22.3期の連結業績は、売上高が2,080億円、前期比1%減、営業利益が510億円、同20%増。微減収だが、全主要セグメントで営業増益を達成した。農業化学品で当期に売上計上を予定していたフルララネルの一部出荷が23.3期にずれ込んだ影響はあったが、ディスプレイ材料や半導体材料がけん引。2月に公表した業績予想から営業利益で10億円上振れて着地した。

23.3期連結業績の会社計画は、売上高が2,190億円、前期比5%増、営業利益が535億円、同5%増。機能性材料が引き続き伸長、ディスプレイ材料は小幅増収ながら厳しい市況や固定費増加を織り込み減益を見込むが、反射防止コーティング材など半導体材料が大きく伸長し、全体をけん引する計画。農業化学品も増収増益で業績貢献する。顧客の在庫調整が完了したフルララネルの増収、ロイヤリティ収入増も期待できよう。構造改革の一環で2022年6月にメラミンの生産を停止。メラミンはアンモニア系製品群中最大の売上高製品だが営業赤字であり、生産停止によりリソースの高付加価値品シフトを図る。中期的に業績寄与が期待できよう。

[株価動向・投資判断]

機能性材料が業績をけん引。加えて構造改革に伴う事業領域の見直し効果も寄与し、中期的な成長を見込めよう。

<4021 日産化 業績:日本基準>

[今期予想の配当金は発行会社予想]

	売上高	営業利益	経常利益	当期利益	1株利益	1株配当
	百万円 (伸び率)	百万円 (伸び率)	百万円 (伸び率)	百万円 (伸び率)	円	円
21.3	209,121 (1)	42,530 (10)	43,893 (10)	33,470 (9)	231.7	104.00
22.3	207,972 (▲ 1)	50,959 (20)	53,690 (22)	38,776 (16)	271.9	122.00
23.3 予	219,000 (5)	53,500 (5)	54,100 (1)	39,600 (2)	280.9	154.00



[主要株価指標]	(売買単位: 100株)
株価 (2022/6/24)	6,280 円
年初来高値 (高値日)	7,670 円 (22/6/8)
同 安値 (安値日)	5,930 円 (22/1/25)
予想 P E R (23.3 予)	22.4 倍
1株株主資本 (PBR算出用)	1,461.1 円
P B R	4.30 倍
予想配当利回り	2.45 %
(1株当たり配当金年154.00円)	
R O E (22.3)	19.2 %
発行済み株式数	14,200 万株